

水稻の9月上中旬の巡回調査結果の概要

【東北信】 調査日 9月5, 6, 9, 10, 11, 12日

(1) 穂いもち

- ・山間地等で穂首いもちが散見されるほ場があったが、全般に発病穂率は平年に比べて低かった。発生地点割合は、平年並みであった。

(2) 紋枯病

- ・発病株率、発生地点割合ともに、平年に比べて低かったが、9月に入り発病株が急増しているほ場がみられる。

(3) 白葉枯病、ごま葉枯病・小粒菌核病

- ・いずれの病害も調査ほ場内での発病は確認されなかった。

(4) 稲こうじ病 (写真1)

- ・東信地域の1ほ場、北信地域の1ほ場で発病を認めた。特に東信地域の発生ほ場は、平年に比べて発病株率、発病穂率が高かった。



写真1 稲こうじ病 (佐久市)

(5) ニカメイガ (ニカメイチュウ)

- ・上田市及び青木村の4調査ほ場で白穂の被害が認められた。白穂率はこれらの地域で平成26年頃から高めに推移しており、本年も平年に比べて高かった。その他の地域では、白穂率は平年に比べて低かった。

(6) ウンカ類・ツマグロヨコバイ

- ・セジロウンカ成虫は、東信地域で捕獲数、発生地点割合ともに平年に比べてやや高かった。北信地域は捕獲数、発生地点割合ともに平年に比べて低かった。
- ・トビロウンカは捕獲されなかった。
- ・ツマグロヨコバイ成幼虫の捕獲頭数は、東信地域では平年に比べて少なかった。北信地域は平年値が高いために平年並みの捕獲頭数であったが、中発生～多発生のほ場が8ほ場あった。

(7) 斑点米カメムシ類

- ・東信地域の2ほ場、北信地域の6ほ場で捕獲された。信濃町の調査ほ場では、アカスジカスミカメの幼虫が8頭捕獲され、発生量の増加や未確認の地域への拡大が心配される。

(6) その他

- ・イナゴは、15調査ほ場で確認され、全県ではほぼ平年並みの発生であったが、長野地域で捕獲数、発生地点の割合ともに平年に比べて高かった。
- ・クサキリ類による白穂被害は、6調査ほ場で確認され、白穂率、発生地点の割合は佐久地域でやや高かったが、全般にはほぼ平年並みの発生であった。
- ・コブノメイガの被害は確認できなかった。

・イネツトムシ（イチモンジセセリ）の『つと』は2ほ場で確認された。（写真2、3）



写真2 イネツトムシの『つと』（長野市）



写真3 イネツトムシ（イチモンジセセリ幼虫）

【中南信】 調査日9月3、4、5、6、11日

(1) 穂いもち

・調査を実施した38ほ場中8ほ場のみの発生（写真4）であり、平年に比べ少なかった。

(2) 紋枯病

・38ほ場中15ほ場で発病を認め（写真5）、ほぼ平年並みの発生であった。ただし、一部に上位葉まで進展し枯れ込む株が見られるほ場もあった。

(3) 白葉枯病、ごま葉枯病、小粒菌核病

・今回の調査ではいずれの病害も発病を確認できなかった。

(4) 稲こうじ病

・38ほ場中発病を認めたのは4ほ場のみであった。



写真4 いもち病（穂いもち）といもち病菌分生孢子（木祖村）



写真5 紋枯病、病斑上に形成された菌核（松川村）

(5) ニカメイガ

・被害は確認できなかった。

(6) ウンカ類、ツマグロヨコバイ

・セジロウンカは、すくい取り調査（ネット 20 回振）を実施した 38 ほ場中 12 ほ場で捕獲された。平年に比べ発生は少なかった。

・トビイロウンカは 1 ほ場でのみで捕獲された。

・ツマグロヨコバイは 28 ほ場で捕獲された。発生は平年に比べやや多く、一部に著しく発生の多いほ場もあった。

(7) 斑点米カメムシ類

・38 ほ場中 24 ほ場で捕獲された。アカヒゲホソミドリカスミカメが 13 ほ場で最も多く、次いでアカスジカスミカメ（写真 6）が 9 ほ場であった。他に、トゲシラホシカメムシ、ホソハリカメムシ、アカヒメヘリカメムシ及びクモヘリカメムシ（写真 7）が捕獲され、これら中～大型カメムシの発生の多いほ場もあった。

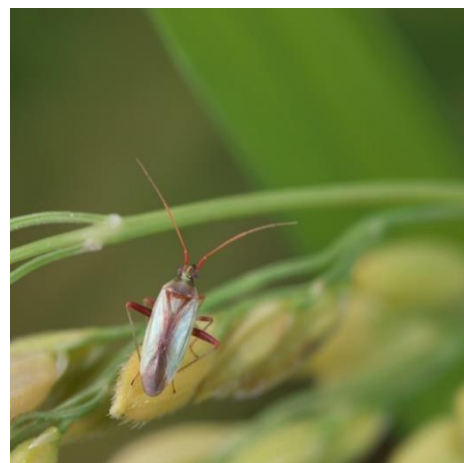


写真 6 アカスジカスミカメ（白馬村）

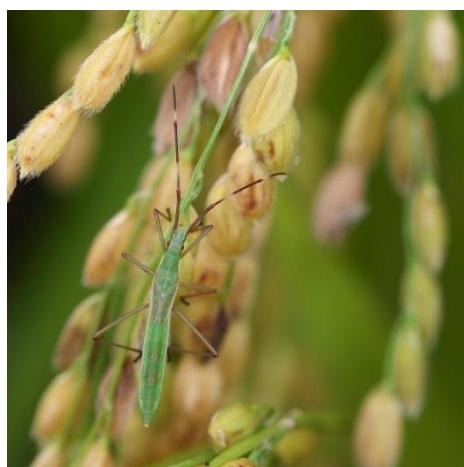


写真 7 クモヘリカメムシ幼虫（飯田市）

(8) その他

・イナゴは 11 ほ場、クサキリは 4 ほ場、ササキリ類は 20 ほ場で捕獲された。クサキリ、ササキリ類による白穂の発生も 6 ほ場で確認された（写真 8、9）。

・イネツトムシによる被害は今回の調査では確認できなかった。

・コブノメイガの被害は確認できなかった。



写真 8 クサキリ類の食害（麻績村）



写真 9 ヒメクサキリ（諏訪市）